

「長崎街道」と

「花と歴史と技術のまち大村」

おむら
大村市長(長崎県)

そのだひろし
園田裕史



はじめに 大村市の概要

大村市は、長崎県の中央部に位置し、人口9万5000人のまちである。長崎県の玄関口長崎空港があるまちといえ、ご存じの方

もおられるだろう。「花と歴史と技術のまち」をキャッチフレーズとしており、桜や花菖蒲など花の名所として有名で、古代から近代にわたってさまざまな歴史を有するまちでもある。



玖島城跡(大村公園)

本市は、大村藩2万7千石の城下町として栄えた歴史があり、その基礎を築いたのが、戦国時代の領主大村純忠である。純忠は、戦国時代を生き抜き、その後の大村藩の基礎を築き上げた人物であるが、その活路をポルトガル人との南蛮貿易に求めた。貿易船を領内に招き入れると同時に、キリスト教の布教も許可し、さらに自らもキリシタンとなり、日本初のキリシタン

大名となったことは有名である。最終的には、大村領内の長崎を貿易港として開港し、南蛮貿易の拠点とした。この様に貿易でにぎわった長崎は、その後、天領となり、大村領から離れていったが、長崎の発展の端緒を開いたのは純忠といえるだろう。

長崎街道と大村の歴史



歴史の道長崎街道

長崎街道は、長崎から小倉を結ぶ江戸時代の脇街道のひとつである。脇街道ながら、鎖国下でヨーロッパとの唯一の窓口であった長崎へつながる道として、重要な街道として位置付けられていた。長崎の出島に上陸した海外の貴重な物品や情報は、長崎街道を通り、江戸をはじめ全国へと

伝えられていった。時には外国人の一行や象などの珍しい動物が通り、沿線の人々を驚かせた逸話が多く残っている。幕末には、新しい知識を求めた文人や志士がこの道を通って長崎を目指しているこ



長崎空港と大村



大村寿司

とから、江戸時代の政治、文化に影響を与えた重要な道といえる。長崎街道は、大村市内を南北に走り、沿線には多くの史跡が残っている。諫早領との境の鈴木峠は、当時の雰囲気の色濃く残っており、文化庁「歴史の道百選」に選

定されている。

本市には、街道の宿場として大村宿と松原宿の2つの宿があった。大村宿は、城下の宿場として、本陣や使者屋などが設けられ、大変にぎわっていた。現在も大村市の中心市街地となっている。松原宿には旅館跡など当時の景観が残っており、この2つの宿は、江戸時代の歴史を今に伝えている。

シュガーロードの取り組み

長崎街道につながる取り組みとして、現在、福岡、佐賀、長崎にまたがり、官民で構成する協議会を設置し、シュガーロード(砂糖の道)の事業を進めている。砂糖は長崎での貿易品のひとつで、当時、貴重品であった。長崎街道沿線には菓子などの砂糖文化が多く、本市の名物「大村寿司」も、甘みのある押し寿司である。このように街道が砂糖を運び、その文化を伝搬した歴史が考えられる。こうした地域間共通の歴史的題材を通じてアピールしていくことも、地域間連携の形のひとつではないかと考えていることから、平成29年度、日本遺産認定に向けて手続きを進めているところである。

まちづくり しあわせ実感 都市を目指して

本市は、全国的に人口減少が進む中、着実に人口が増加し、将来、人口10万人都市を目指している。本市には、世界初の海上空港である長崎空港をはじめ、高速道路大村インター、そして現在、九州新幹線西九州ルートの新幹線も進んでおり、空路、高速道路、新幹線と

いった高速交通網が揃うこととなり、長崎街道の時代から交通の要衝としての歴史が息づいている。古来から、海外に目を向け、新しいものを取り入れてきた歴史は今につながるものであり、「行きたい、働きたい、住み続けたい しあわせ実感都市大村」を将来像とし、今後のまちづくりを進めていくこととしている。

長崎街道

一口メモ

異文化の交流路「長崎街道」

長崎街道は、山陽道とを結ぶ豊前小倉(一説によると大里)を起点に黒崎、木屋瀬、飯塚、内野、山家、



はるだの筑前六宿を経て、肥前田代、原田の筑前六宿を経て、佐賀、塚崎、大村などを経由して長崎に至る街道。約230kmの道のりで、25の宿場町があった。

この道に関連して、鹿島や多良を通る多良街道(浜道)や、彼杵から時津まで、大村湾を舟で渡る時津街道などがあつた。

当時の長崎は、鎖国下で唯一徳川幕府直轄の貿易港としてオランダ・中国の2か国に門戸を開いており、異国からの文物、情報などが長崎街道を通じて全国に伝播していった。

企画協力…全国街道交流会議「街道交流首長会」